

特集 .....	
新会長挨拶	01
各幹事から一言	02
寄稿 .....	
北大西洋で波を計る①	03
情報 .....	
海洋未来技術研究会渡航援助報告	07
「気候系の hot spot」若手研究者連絡会活動報告	08
若手武者修行セミナー開催報告	10
学会記事 .....	
2015年秋季大会開催通知	14
2015年春季大会開催報告	16
三賞推薦依頼・環境賞推薦依頼	18
連載 .....	
海のエッセイー7	19
アカデミアメラノコリア (若手のコラム)	20



## 会長あいさつ

### 日本海洋学会会長に就任して

東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻 日比谷 紀之

このたび、栄誉ある日本海洋学会の会長を拝命することになりました。責任の重大さに、身の引き締まる思いです。至らぬ点が多々あると思いますが、何卒よろしくお願い致します。私にとって、今年は、**海洋学会に入会してちょうど35年目**。学生だった当時とは全く違う立場からの新たなスタートとなりますが、その冒頭に当たって、少しでも挨拶させて頂きます。

ここ数年、私は、日本海洋学会の外の学会、例えば、アジア・オセアニア地球惑星科学会 (AOGS) や日本地球惑星科学連合学会 (JpGU) の役員、さらには、国際海洋物理科学協会 (IAPSO) の役員を務めてきました。これらの学会では、ご多分にもれず、会員を増やすには何が必要か、また、国際化をどうやったら果たせるかといった議論が盛んに行われています。この一方で、私は、最近4年間、Journal of Oceanography の担当幹事として海洋学会の幹事会にも身を置くことになり、国内外の学会での仕事を並行して進めるという、とても貴重な機会を得ることができました。そのような仕事を続けるうちに、**日本海洋学会にはまだまだ「伸びしろ」がある**、言い換えれば、海洋学会のさらなる発展に向けて、こんなことを試してみたらよいのではないかというポイントが、いくつか頭に浮かんできました。

これには、海洋学会の内部にかかわる、今すぐに着手できるものと、海洋学会と外部との関係にかかわる、少し時間をかけて進めていくべきものがあります。

まず、海洋学会の内部にかかわることですが、大きな柱は二つです。**大会の研究発表に新しい形式を導入すること**、それと、**これまでの有益な事業を継続し、発展させていくこと**の二つです。

大会の研究発表については、会員があらかじめ提案した特定の

テーマについて研究発表を募集する「テーマ設定型」のセッションを取り入れていきたいと思えます。最近の大会では、研究発表の前後に設けられるシンポジウムの開催件数が増え、その一方で、研究発表の件数が減っていることが問題になっています。現在の研究発表では、一人の持ち時間が15分に限られていて、十分な議論ができない。それよりも、シンポジウムの方が、興味を同じくする人たちの間で、濃厚な実のある議論ができる。そういった点が、主な理由のようです。しかしながら、大会の本体ともいべき研究発表の件数がそのまま減少の一途をたどり、付随するシンポジウムのウェイトばかりが高まっていくというのは、大会のあるべき姿とは思えません。研究発表そのものを、より魅力的なものに作り変えていく必要があります。



私は、この点に関し、AOGS や JpGU のように、まず、**会員が大会のセッションとして取り上げたいテーマを提案し、そのセッションの方向性/研究の切り口を明確にした上で研究発表を募集する**という形を取り入れられないかと考えています。そうすれば、それぞれのセッションに、上述したシンポジウムの良さを組み込むこともできます。セッションの中に Invited Speaker を組み込んでもよいと思えます。さらに、それを海外からの著名研究者という形に広げていければ、海洋学会が目標の一つとしてきた国際化への序章としても位置付けることができます。若い人たちの研究発表を海外の研

究者に聞いてもらう機会にもなり、とてもよい刺激になるだけでなく、将来を見据えた人脈づくりにも繋がるはずです。

もちろん、すべてを一気に変えてしまうつもりはありません。提案されたテーマにあてはまらない研究もありますから、その発表の受け皿として General Oceanography のようなセッションを設けておく配慮も必要です。参加したすべての人たちが普段の研究生生活とは違う刺激を受け、よりよい研究を進めていくための driving force になるような、実りのある大会にしていきたい。そう強く思っています。この新しい発表形式は、私が所属している東大本郷キャンパスの主催する 2016 年度の春季大会で試験的に導入し、より魅力的な大会のあり方を学会員の皆様と一緒に模索していきたいと考えています。

海洋学会がこれまで続けてきた大切な事業も充実させていきたいと思えます。

例えば、**若手支援**です。これについては、残念ながら解散してしまった「海洋未来技術研究会」から今までに補助して頂いた資金を、継続的に、若手の海外渡航の支援に使わせて頂き、今後の海洋学会を背負っていく若手研究者の育成の手助けをすることができればと思っています。**企業の会員の皆様との関係**も、ぜひとも強化すべきポイントの一つです。若い時には理論指向が強かった私自身も、最近は海洋観測を通じた研究がエフォートの半分を占めるようになってきました。理論研究と観測の両方を行って実感しているのですが、新たな測器開発と研究の進展は強くリンクします。春と秋の大会で行っている企業展示も、もっと充実させ、新しい研究の芽、新しい測器開発の芽を育てる場にしていきたいと思っています。

春と秋の大会に並ぶ海洋学会のもう一つの本丸である**学会誌の充実も重要**です。今や Journal of Oceanography (JO) は、低迷期を脱して、インパクトファクタが 1.5 に達しています。2014 年の 8 月から論文掲載料として会員に 2 万円、非会員に 5 万円を課すようになってからも、依然、多くの投稿が続いています。海外からの投稿数も全体の約 2/3 に達しており、海洋学会の国際化を図る上で JO のさらなるレベルアップは不可欠な重要課題です。投稿数、および、掲載数が継続して増えるよう、石坂 JO 編集委員長のもとで益々発展していくことを望んでいます。

次に、海洋学会と他の学会や研究分野との協力、そして、国際化

についてです。これからの海洋学会は、もっと外部に目を向け、日本だけでなく世界の海洋科学を、さらには地球科学全体を引っ張っていく気概を持つこと、そして、そのための戦略を練ることが、とても重要な課題であると思っています。

2014 年度は、「学術会議への大型研究マスタープランの申請」で苦い経験をしました。地球科学の関連分野から学術会議に申請した大型研究マスタープランは、海洋科学のみならず、ほぼ全滅に近い結果になり、年末には、東大・地震研究所で地球科学関連分野の研究者グループが一堂に会して、対策を話し合いました。また、どの分野も、目減りしている基礎研究に対する研究資金をどう確保していくかといった問題を抱えています。このように、**地球科学に関連した分野が協調して活動していかなければならない機会が増えて**います。現在 JpGU は、2016 年の AGU との共同シンポジウム、2017 年の AGU-JpGU 共同開催を企画し、国際化への道を走っています。ここに、海洋学会がどう絡んでいくのか、あるいは、独自路線を歩んでいけばそれでよいのか、どこまでを JpGU とともにを行い、どこに海洋学会の独自性を求めていくべきなのか、現在の海洋学会と JpGU との距離感を、きちんと見つけ直す必要があります。

独自性に関して言えば、上述した大型研究マスタープランの申請でも、特に総合科学としての色彩が濃い海洋科学の場合には、その幅広さを前面に出すと、審査する側には、茫漠とした、総花的な申請としか映らなくなるという危険性があります。海洋に関するトピックが細分化している現在、もう少し絞って申請する、あえていえば、その時点で**海洋学会が進めていきたい分野に優先順位をつける**というような思い切った作戦も必要になってきているように思います。

このような独自性をきちんと意識した上で、地球科学関連の他学会との共同歩調をどのように進めていくべきなのか、大変に難しい問題ですが、今、これに取り組むことを避けてはいけません。

このようにざっと考えてみても、海洋学会が抱えている難題は山積みで、挙げれば、きりがありません。私の在任中に解決できる場所は解決し、推進すべきところは推進し、海洋学会のさらなる発展、国際化に向けて全力投球していく所存です。

今後とも学会員の皆様のご協力を頂けますよう、何卒よろしくお願ひ致します。

## 幹事会メンバーから一言づつ

### 神田 穰太 (東京海洋大学)

日比谷会長をサポートさせていただき役目を仰せつかりました。須賀前副会長の担当されてきた若手支援を引き継ぎ、前幹事会で十分な対応ができなかった震災対応については、新たに強力な担当幹事お二人に加わっていただいで共に進めていきたいと思っています。大会開催のあり方等を含めて、海洋学会は転換点にあると思えます。海洋学会がこの局面を乗り切れるよう、会長の舵取りを支えたいと思えます。どうぞよろしくお願ひいたします。

(副会長、震災対応、若手支援)

### 石坂 永二 (名古屋大学)

この度 JO の編集委員長という大役を仰せつかりました。これまでの編集委員長及び編集委員の活躍で、JO は投稿から出版までの時間の短い雑誌として確立しています。今後は、品質のよい国際的な論文を、さらに多く、迅速に出版していくために尽力したいと考えております。学会員の皆さまには、ぜひよい論文をたくさん投稿していただくと同時に、JO の論文をどんどん引用していただき、

国際的に JO を宣伝していただければと思います。

(JO 編集委員長)

### 市川 洋

今期の「海の研究」編集委員長を務めることになりました。久保田前編集委員長の路線を踏襲し、発行経費を考慮しながら年間 12 編以上の原著論文の掲載を目指します。その中で、「海の研究」の和文・オープンアクセス誌という特性を生かし、海洋学に関心を持つ学部学生を主な対象とした総説や生活に密接に関連する海洋についての適切な情報の国民へのタイムリーな提供を主な目的とする総説・論説の掲載とシンポジウムなどの特集号の刊行も推進したいと考えております。「海の研究」刊行について、ご支援、ご助力をよろしくお願ひ申し上げます。(海の研究編集委員長)

### 小笠 恒夫 (中央水産研究所)

幹事会はおろか学会業務そのものを殆ど担当せずにこの年までできてしまったので、これからご恩返ししていきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。(広報、震災対応担当)

## 河野 健 (海洋研究開発機構)

引き続き、会計を担当します。前期はあまり役に立ちませんでしたので、今期は職責を果たそうと思っております。あわせて海洋観測ガイドライン編集委員会も担当します。皆様のご協力をお願いします。(会計、海洋観測ガイドライン編集委員会担当)

## 津田 敦 (東京大学)

9年目の幹事会であり、そろそろ代わってほしいなと思うこの頃です。ご一緒させて頂いた会長も今脇、小池、花輪、植松、日比谷会長と5人目となりました。日比谷会長は行動力のある完璧主義者と拝見しました。幹事会で余計なことを言うと会長の顔が曇ります。しかし、このあたりが私の役どころかも知れません。JOSNLでは編集委員を募集しています。どなたか一緒にやりませんか?

(JOSNL 編集委員長、水産・海洋学研究連絡協議会担当)

## 山中 吾郎 (気象研究所)

今期も引き続き、選挙および研究発表を担当することになりました。幹事会メンバーと協力しながら会務にしっかり取り組み、日比谷会長を支えていく所存です。どうぞよろしくお願い致します。

(選挙、研究発表担当)

## 伊藤 進一 (東京大学)

はじめての幹事でわからないことばかりですが、集会担当として総会、評議員会、幹事会の記録を正確に残すこと、教育問題、震災対応の懸案事項を少しでも前進させることに努力してまいりますので、ご指導、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(集会、教育問題、震災対応担当)

## 東塚 知己 (東京大学)

学生会員の頃からお世話になってきた日本海洋学会の発展のため、

めに、貢献していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。初めての幹事ですが、先輩庶務幹事の小畑さんから早く庶務の仕事を学んでいきたいと思っております。(庶務担当)

## 原田 尚美 (海洋研究開発機構)

パンフレット作成、大会でのハイライト発表のプレスリリース、ウェブサイトの充実など、多くの方々に学会をアピールすべく活動していきます。(広報、JpGU 担当)

## 小畑 元 (東京大学)

今期も庶務幹事を務めることになりました。皆さんの役に立てるように頑張ります。(庶務、ブレークスルー研究会担当)

## 川合 美千代 (東京海洋大学)

2期目になりました。前期は議事録を書く以外の貢献はあまりできませんでした。今期はもっとお役にたてるよう努力したいと思っておりますので、よろしくお願い致します。(集会、教育問題担当)

## 齊藤 宏明 (東京大学)

はじめての幹事ですがよろしくお願い致します。まずはしっかりと経理実務を行うと共に、環境変化に応じた健全な会計を行うために必要なことについても検討していきたいと考えています。

(会計担当)

## 鈴木 昌弘 (産業技術総合研究所)

今期も継続して「研究発表」「選挙」「海洋環境問題」を担当いたします。特に研究発表については、セッション制度の導入など会員にとってより魅力ある大会の実現に向け努めてまいります。よろしくお願いいたします。

(研究発表、選挙、海洋環境問題、海洋環境委員会担当)



## 寄稿 ①

# 北大西洋で波を計る①

九州大学名誉教授 光易 恒

1980年の秋、ARSLOE (Atlantic Remote Sensing Land and Ocean Experiment) と呼ばれる米国の波浪研究プロジェクトに参加した。このため、クローバー型波浪計を日本から運んでデラウェア大学の観測船ケープ・ヘンロップン号に積み込み、北西大西洋のケープ・ハテラス沖に設定された実験海域で波浪観測を行った。1980年と言えば、既に35年も昔のことで、共同研究の進め方、国際的な通信手段、観測船の装備等に関しては現在とはかなり異なる点もあるが、観測活動の基本的な点に関しては大差が無い。当時の日記をもとにして、海洋における船舶を利用した研究活動と船上生活の一例を示すことにした。

## 1. ここの始まり

### 1980年5月19日(月)

5月5日、突然に米国から1通の手紙が届いた。送り主は米国の Coastal Engineering Research Center (CERC) の技術所長サヴィーユ博士で、手紙の内容は次のようなものであった。

光易 恒 博士

米国陸軍の海岸工学研究センター(CERC)はアメリカ海洋大気庁 NOAA (National Oceanic and Atmospheric Administration) と共同して、海洋波、海洋の流れ、海底土砂の移動などを研究する為、今

年の秋、複数の省庁にまたがるプロジェクト研究「大西洋リモートセンシング海陸実験 ARSLOE」を計画しています。

この実験は、今年10月1日から11月15日にかけて、ノース・カロライナ州のダックにある CERC の現地実験場に近い海域で行われます。計画の主要な目的は、種々の波浪観測システムの性能の詳細な比較検討にあります。このため、現地用波浪計測システムの設置ならびにリモートセンシング・システムの運用に関し具体的な計画が立案されています。

現地用波浪計としては、ウェーブ・ライダーブイ、ピッチ・ロールブイ等に加え、リモートセンシング機器として、沿岸設置型のレーダーと航空機搭載型のレーダーが含まれています。

私達は、貴方がこの実験に参加されるよう招待致します。貴方達のクローバー型波浪計による海洋波の方向スペクトルの計測は、この計画に対する極めて貴重な支援となるものと考えます。もし貴方がこの計画に対し興味をもたれるならば、波浪計の利用の可能性、波浪計を操作する為に必要な機材、波浪計を実験場に運搬する方法等について貴方と検討致したいと思います。これに関し、最も効率的な方法は、まず参加の可能性について手紙で検討する事と考えます。さらに詳細な議論は、この六月に NOAA が主催する「波浪モデルの研究集会」に貴方が参加された際に行ないたいと考えています。

この件に関し返事をお待ちしています。

何事によらず事の始まりは突然の場合が多い。しかしよく考えてみると、それには何らかの背景がある。今回の手紙の背景には、私達が1970年代に高性能のクローバー型波浪計を開発して大規模な波浪観測を行い、それまで殆ど知られていなかった海洋波の方向スペクトルの構造を、世界に先駆けて解明したことがあると考えられる。北大西洋で米国の研究グループと共同して波浪観測を行なう事は、極めて興味のある仕事だ。ぜひ参加する方向で検討したい。

1980年6月26日(木)

「波浪モデルの研究集会」6月3日から5日にかけて、ワシントンDCで開かれた「波浪モデルの研究集会」に出席した。この会議は、NOAAの海洋関係の責任者ベアー博士が中心になって組織したもので、PiersonやPhillipsをはじめ、世界各国の主要な波浪研究者が集まって海洋波の研究の現状に関し広範囲の討議を行なった。しかし、肝心のARSLOEに関しては、計画の概要が説明されただけで、私達の参加に関する具体的な打ち合わせはほとんど行われなかった。

その後も何ら連絡が無いので、この話は立ち消えになったのかと考えていたところ、今日、座間の米軍キャンプから電話があった。電話の内容は、ARSLOEの予算の問題や観測機材を日本から米国に輸送する方法に関するもので、その中には**米軍の輸送機を使用して機材を沖縄経由で米国に輸送してはどうか**と言う、驚くべき提案も含まれていた。



写真1 波浪モデル研究集会にて(気鋭の若手研究者と共に)  
左から、H. Yuen, W. J. Plant, 筆者, E. D. Kokelet, C. L. Vincent, D. C. Esteva

最初、米軍キャンプからの連絡に非常に驚いたが、よく考えてみるとCERCは基礎研究を多く手がけているが、組織的には米国陸軍工兵隊に属しているのだから、米軍のルートを利用して連絡が来てもおかしくはない。CERCから軍の強力な連絡網を利用して座間の米軍キャンプに電話やテレックスで連絡が入る。その内容を、キャンプの関連部署の日本人職員が私達に伝える。これは、効率的な方法だ。「後記」この1980年頃、大学には、電子メールやファックスのような便利な通信手段は全く無く、大企業等にあるテレックスすら大学には無かった。文面による唯一の通信手段は長文の電報であった。

## 2. 計画の難航と解決

1980年7月16日(木)

「難航」ARSLOEに関し、CERCとの打合せを座間キャンプを介して半月以上も続けている。しかし、計画を具体的に進めようとすると、予算の受け入れ、研究者の出張、機材の輸送等に色々な困難が生じてきた。基本的には、今まで例を見ない、研究機関とは言

え、米軍の組織からの依頼に、日本の国立大学が対応する点に原因があるようだ。しかし、早急に決断を必要とする。現時点で問題を整理すると、このまま計画を進める場合には、(1)招待者を米陸軍のCERCではなく商務省のNOAAに変更してもらう。あるいは、(2)休暇を取って個人として出掛ける。ただし、国の機材の持ち出しや研究補助員の出張など、この計画は非現実的だ。もう一つは、(3)新たに発生した国内の研究計画を理由に参加を断る事だが、これは今となっては望ましくない。

1980年9月11日(木)

九州の東岸を北上した台風により、我が家の裏庭にある無花果の大木が傾いた。大学の研究室ではそれほど強い風が吹いたとは思わなかったが、玄海灘に面した高台にある我が家付近ではかなり強い風が吹いたようだ。

ARSLOEに参加する計画は、数ヶ月経過しても全く見通しが立たない。大きな計画が未解決の状態にあると、精神衛生上はなほだ宜しくない。計画が中止になれば、きれいさっぱりと忘れて次の仕事に集中できる。しかし今回の計画は実現する可能性が十分あるので、日常の仕事に並行して準備を進める事が必要で、絶えず緊張を強いられる。特にこの計画では、大量の観測機材の整備と国外輸送をはじめとして、大変な準備を必要とする。しかし、計画が中止となれば一切の努力は水泡に帰す。

1980年9月19日(金)

「解決」急転直下とは、まさにこの様な状況をさすのであろう。デラウエア大学とNOAAとから殆ど同時に長文の電報が到着し、ARSLOEに関連した諸々の難問が全て解決した事を伝えてきた。

NOAAの長官からの電文は、次のようなものだ。「貴方がARSLOEに参加するための予算をデラウエア大学に支給し、一切の手配を同大学に依頼した。従って、デラウエア大学から詳しい連絡が届くはずだ。貴方が使用することになった同大学の海洋観測船ケープ・ヘンロップン号は、ルイス港から10月15日に出港する予定である」。私達の渡航に関わる主官庁が、米軍所属のCERCから商務省所属のNOAAに移ったようだ。しかもNOAAは、私達がデラウエア大学に協力して参加する形にした。これは、私達にとってもっとも理想的な参加の形式である。

一方、デラウエア大学からの電文は、次のようなものであった。「貴方方が10月15日からの観測に参加するため、10月6日までに大学に到着出来るように航空券を手配する。したがって、貴方に同行する研究者の名前とその身分を、至急知らせしてほしい。観測機材の空輸に関しては、デラウエア大学の支払いで、運送会社「東洋・フリッツ」に輸送を依頼した。従って、同社の大阪事務所と連絡をとってほしい。」

至れり尽せりの手配である。私に同行する研究者として、本多忠夫助手に決定して連絡した。彼は、波浪観測および波浪データ解析のエキスパートである上、船酔いに全く無縁なので心強い。しかし、10月6日といえば、あと2週間と少ししかない。この間に機材を具体的に輸送する方法(空輸用の梱包、国内輸送、通関手続き等)、各種事務手続き：出張手続き、機材の国外持ち出し手続き、さらに約1ヶ月間にわたる留守中の仕事の手配、これらを全て片付けなければならない。すさまじい事になった。

それにしても、9月初めの時点では、様々な難問を解決する見通しが全くたっていなかった。場合によると、私たちの参加計画自体が立ち消えになるのではないかとさえ考えられた。それを、わずか10数日の間に理想的な形で全て解決し、一旦解決すると実に迅速かつ確に計画を進める米国の政府機関および大学のシステムには全く感心の他はない。(次号以降に続く)



## 書評①

# 『川はどうしてできるのか』

評者：東京大学大気海洋研究所 川幡 穂高

藤岡 換太郎 著

講談社ブルーバックス 2014年10月発行  
222頁 本体860円 ISBN978-4-06-257885-1

本書は「川」に焦点を絞って、地球上にあるさまざまな川の特徴について記したものである。「川」は私達の生活の中でも、海にとっても非常に身近なものである。なぜなら、海で蒸発して陸に降った水は、再び「川」の水となって海に戻っていくからである。近頃の問題に関連して河川水の水質などについて詳しく書かれたものは多くあるものの、「川」そのものがどのようにして出来たのかについての本は殆ど無い。本書は、地球科学者であり地質学者が書いた「川」の本で、新感覚で読めるのではないかと思う。

本書は上手に読者の興味を掘り起こすように「川の謎」、「具体的な多摩川」、「大胆な川に関する仮説」に分けた工夫がされている。「川の謎」の中にある、ヒマラヤを乗り越える川なども、意外に思われるかと思う。なぜなら、世界的に有名なインダス川やブラマプトラ川はヒマラヤを迂回しているのに、名も無い「川」が富士山より高い標高をヒマラヤを横切るようにして流れているからである。読み進めていくと、この「川」がたどった歴史が明らかになる。それも、数千万年の歴史を反映しているのである。インド大陸は南極大陸、オーストラリア、アフリカ大陸から分離して、アジア大陸に激突して、今に至っている。ヒマラヤを乗り越える「川」はそれ以前から存在していた「川」なので、何千万年間も毎日せせと河床を削削して「川」として存在できるようにがんばっていた、というくだりは感動すら覚える。このように、現在流れている「川」は、現在の地形を形作っているのみならず、過去の地球の数千万年の歴史を反映している。これは揚子江、メコン川、そして、北部ベトナムに注ぐホン川の歴史にも表れている。さらに、同じ水なので認識し難いが、海の中にも「大河」が流れている。

第二章ともいべき、「川を下ってみよう」は、時間のある時に実際に川に出かけて、「川」がどのように始まり、終わるのかを観察するのに適している。言わば、巡検(いろいろな所を調べて回る)のガイドのような内容となっている。例として「多摩川」が扱われているが、出発点ともいべき分水嶺の石碑、水干からの最初の一滴、奥多摩湖、中流の多摩川、これらが作り出す武蔵野台地、そして、最後の河口原点と、それぞれ特徴と派生する現象が解説されている。実際に、「多摩川」の原点から終点まで遠足する際のガイドとして最適な記述がされている。図2-25にはイラストまで入っていて、学校の夏休みの宿題に使うととても便利と思われる。

最後の「川についての私の仮説」は、現状の河川が成立した根源を考えたもので、「川」がどうして、地球に存在しているのかという疑問に真正面から向き合っている。巨大な大陸も地球史において離合集散を繰り返してきた。ニジュール川とアマゾン川は昔は一連の流れで、巨大な古アマゾン川が存在した可能性や、巨大な大陸には3つの超長河川が存在しそうだ、など夢がある仮説が説得力をもって展開されている。

本書は一般向けの本であるものの、内容は広く、質も高い。先に述べたが、地球に「川」が存在すること、大陸の生成、その進化が大局的に深く結びついていることを本書は教えてくれる。1冊購入して、家族も興味をもって読むことができ、特に地球惑星科学の専門の人は、この「川」の解説の背後にある知識からより深いインスピレーションを得ることができると思う。1冊で何人もが楽しめる最良の書と自信をもって勧められる本と考える。



## 書評②

# 『深海と地球の事典』

評者：広島大学大学院生物圏科学研究科 長沼 毅

深海と地球の事典編集委員会(編集)

丸善出版 2014年12月発行  
298頁 ISEN978-4-621-0887-6

書名をみて、あの『海洋大事典』(1987)の再来かと驚いたし、『海の百科事典』(2003)の後継かと期待した。両者とも五十音順で、各項目を斯界の第一人者が執筆している。それに比べると本書はまず、五十音順ではないし、多機関からの専門家が集結したわけでもない。要点を衝けば本書は「JAMSTECの事典」だ。いや、良い意味で、である。

昔は本学会でも“海技センター”などと呼ばれてちょっと二流感があったが、今では国立研究開発法人海洋研究開発機構である。英語略称はJAMSTECのまま世界的に有名になった。理事長の平朝彦氏の名を冠した賞が米国地球物理学連合(AGU)で新設されたばかりである。が、国内ではどうだろう、名前ほどには組織や活動の内容が知られていない。だから“大きなパンフレット”として本書が刊行されたとも思えるくらい、内容も執筆陣も編者もJAMSTEC一辺倒である。いや、OBである私としては嬉しいのだ。

でも、褒めるのは後にして、はじめに難点を挙げておく。まず、深海(そして海底下)という人類のフロンティアを扱うのなら、もっと大きなフロンティアである「宇宙」との対比が有効であったろう。そして、宇宙でも議論になる「有人ミッションの必要性」への論陣を張ってほしかった。すぐ a priori に「科学者による直接観察が中核」だから「しんかい10000」が必要だと断定しても説得力がない。

本書は、深海を知る、深海に生きる、深海を調べる、深海から知る、という4部構成である。最初の「深海を知る」は「基礎知識」と銘打ってあるが、「水深200m以下を深海と定義」とだけ書いてあって、「なぜ200mなのか」の明示的な説明がない。また、海洋の平均水深を3,800mとした上で、深海の体積は全海洋の「93%」と述べているが、3,600/3,800は粗く四捨五入しても「95%」だ。事典ならもっとフレンドリーで、もっと正確であるべきだろう。実はこれが本書の第1ページであり、以降も推して知るべしなのは

残念である。

また、地元愛から言わせていただくと、有人潜水調査船「しんかい6500」への小史で「しんかい2000」が登場するのはもちろんだが、シリーズ初号機の「しんかい」が忘れられているのが残念だ。「しんかい」はいま広島県呉市にある大和ミュージアム(呉市海事歴史科学館)の隣接地に展示されている。広島大学練習船「豊潮丸」の基地と目と鼻の先だ。

海洋では“観測”とともに“数値計算”も重要だ。前者の極みが潜水船や掘削船「ちきゅう」なら、後者はスーパーコンピューター「地球シミュレータ」だろう。それが本書では一回しか出てこない。かつては世界一のスパコンも今はトップ500にも入っていない。だからと言ってこの扱いは可哀想だ。せつかくの事典なら、「地球シミュレータ」が見せつけ理研「京」が受け継いだ計算科学の力をもっと紹介し、その「京」ですら追い抜かれて世界5位(2014年11月現在)というスパコン界の将来を展望してよかったのと思う。

字数が残り少なくなったので、そろそろ良いところを褒めよう。まず、本書はJAMSTECオタクにはたまらないはずだ。ウェブサイトや展示物などで得られる通り一遍の知識を超えた、それこそディープでマニアックな説明が満載なのである。たとえば、五十音順でないで、知りたい項目を探すには索引で調べるしかない。そこで深層水の上昇を指す「湧昇」を索引でひくと…出てこない。そ

の代わり「湧水帯」ならある。いわゆるメタンシープ、海底からメタンを含んだ間隙水が湧出し、異形の深海生物チューブワームやシロウリガイが群生する場所だ。もちろん、もっとアクティブな海底火山の熱水噴出孔の生物群集もある。それが本書では第2ページ目から堂々と現れてくる。ふつうの深海書なら泥か岩ばかりの退屈な海底からはじめるところを、本書ではいきなり劇的に描くあたりは一般受けしやすいかもしれない。

先ほどの「湧昇」が索引にないので試しに「上昇流」をひいてみたら…やはりない代わりに「冗長構成」があった。該当ページをみれば「海底ケーブルネットワーク」だ。目立たないが、深海研究ではとても重要な道具立てである。もともとは通信や軍事の分野で発展したテクノロジーだ。その昔、海底ケーブルを引き上げたら生物が付着していたことから19世紀中葉の深海無生物説が覆った。あるいは、欧米を結ぶ海底ケーブルの敷設から大西洋中央海嶺の存在が浮上し、後の海底拡大説ひいてはプレートテクトニクスの誕生につながった。

海底ケーブルには地震・津波モニタリングという今日的な役割もあるし、その敷設やメンテナンスのために——海底油田開発と合わせて——非軍事の無人探査機(ROV)の発達を促したとも言える。そう、ROVもあるし、自律型無人探査機(AUV)もあるし、…ソフト・ハードの両面にわたって深海オタクの欲求を満たすという意味で、**事典としての本書はむしろ上級者向けかもしれない。**



### 書評③

## 『地球温暖化 —そのメカニズムと不確実性—』

日本気象学会地球環境問題委員会 編  
朝倉書店 2014年12月10日発行  
162頁 本体3,000円 ISBN:978-4-254-16126-7

評者：東北大学大学院理学研究科 花輪 公雄

本書は、地球温暖化研究の最前線を、この分野におけるわが国の第一線の研究者たちがわかりやすく解説したものである。一昨年から昨年にかけて、「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」の第5次評価報告書(AR5)が公表され、また、京都議定書に代わる新たな温室効果ガス削減に向けた国際的枠組みの構築に向けて議論が続けられている中、**まさに時宜を得た待望の本**が刊行されたといえる。

「あとがき」によれば、本書は、第4次評価報告書(AR4:2007年公表)後の『クライメートゲート事件』などのIPCC批判や、温暖化懐疑論が起こるなかで、「地球温暖化の基本原則を適切に社会に伝える」目的で、2011年に構想されたという。しかしその後、巨大台風や記録的な集中豪雨の発生を受け、地球温暖化に対する社会の認識も変化したことにより、「大学院レベルの内容も含めた教科書的なものに様相を変え」、さらに、2013年9月のIPCC第1作業グループのAR5の公表を受け、「そこに含まれる新しい研究成果の解説も本書における重要な役割」になったのだという。すなわち、本書は、AR5の内容を基礎に、現在顕在化している地球温暖化現象に関し、そのメカニズムを解説し、古気候研究も含めた気候変動・変化の実態を示すとともに、モデルを用いた将来予測を紹介したものである。

本書は以下の10章構成になっている。

1.はじめに：問題の背景と本書の目的／2.地球温暖化に関する観測事実／3.温室効果と放射強制力／4.産業革命以降の気候変動の検出と要因分析／5.予測とその不確実性／6.気温・降水・大気大循環の変化／7.日本周辺の気候変化／8.温暖化で起こる地球表面

の変化／9.海面水位上昇／10.長い時間スケールの気候変化

それぞれの章の最後には、「第○章のポイント」として簡潔なまとめが与えられ、読者の理解を助けている。また、各章には、1つないし複数のコラムが設けられ、本文には触れられなかった題材、例えば、「IPCCへの信用がゆらいだ事件とそれをめぐる考察」(コラム1)や、「宇宙線の増減で地球規模の雲量や放射エネルギー収支が変わるのか?」(コラム2)など、関連する話題が述べられている。

本書の執筆にはそれぞれの分野で活躍している**45名の第一線の研究者**が携わった。この中には海洋学会で活躍している会員も少なからず参加している。なお、本書では執筆者がどの部分を担当したかを明記し、さらに査読制度を導入して記載内容をチェックしているため、信頼性が高くかつ読みやすい文章で書かれたものとなっている。

本書の特徴をいくつか挙げたい。まず、地球温暖化研究の最先端がわかりやすく解説されていることでは当然であるが、わかっていることのみならず、**わかっていないことや今後明らかにすべきことが、積極的に記載**されていることである。そして、IPCCの評価報告書がそうであるように、そしてまた本書の副題にあるように、それぞれの考察対象に、評価や判断の不確実性や信頼性が注意深く記載されていることである。

さらに、読者が特に知りたであろう**日本周辺域の地球温暖化による気候変化の将来予測**が、第7章で冬季や夏季の天候、梅雨期の降水特性の変化などに焦点を当てて取り上げられている。また、第8章では世界の海面水位上昇が記述されているが、日本周辺の

海面水位の変化の特徴についても記載されている。

本書は地球温暖化研究の最前線を手軽に知るための好著である。難しい概念もわかりやすく説明されており、大学・大学院教育における参考書として、また、初等・中等教育に携わる教員にとっては格好の題材を提供するものとして、大いに活用されるであろう。

最後に、再版時に考慮してもらいたいいくつかの要望を記しておきたい。引用されている図の原図はカラーのものが多いが、印刷コストの関係から(であろうが)口絵を除き白黒で印刷されている。このため、グラデーションがついているものの判読が容易でない図が少なからず見受けられた。これらの図はぜひ等値線による図に変更

していただきたい。また、ごく一部であるが、図の縦軸・横軸に対するキャプションや図の説明文に不親切なものがあった。図だけをみても理解できるように、再版時には修正してほしい。

本書は日本気象学会編ということもあり、当然のことながら地球温暖化に伴う海洋の変化に関する部分の記載は限定的なものとなっている。地球温暖化にともなう海洋の水温や塩分の変化、海流系の変化、生物地球化学過程の変化、そしてそれらが海洋生態系に与える影響など、人類の生存を脅かす影響出現も考えられる。海洋学会もこのような企画に取り組むことは意義深いことではなかろうか。



## 情報① 海洋未来技術研究会 渡航援助報告

# 2015 ASLO Aquatic Science Meeting 参加報告

長崎大学水産学部 博士2年 森 郁晃

海洋未来技術研究会による海外渡航費の援助を賜り、スペイン・アンダルシア州グラナダで2月22日から27日まで行われた「2015 ASLO Aquatic Science Meeting」に参加させて頂きました。本会議は、淡水および海洋の研究成果が発表される国際会議として世界最大であり、今回は1,654の口頭発表、550のポスター発表があり、2,472名が参加しました。

私は会議3日目のポスターセッションにて、「Seasonal variation in microbial community respiration of dead zone sediments of Omura Bay, Japan」というタイトルで発表しました。本発表では、毎年夏季に貧酸素水塊が発達する大村湾中央部において、堆積物微生物群集の呼吸の動態を解析し、その変動要因と貧酸素水塊との関わりについて考察したものです。今回、私は所属する長崎大学から単身で参加しました。ヨーロッパで行われる国際会議に初めて一人で参加することを不安に感じていた為、出発前に会議に参加する学生を補助するメンター制度に応募しました。メンターをして頂いたWest Florida大学のJane Caffrey先生は、非常に優しい方で、私のポスター発表について熱心に議論して下さると共に、より近い分野の先生方を紹介してくださいました。おかげで非常に有意義な議論ができた上に、海外で貧酸素水塊を研究する方々と知り合うことができました。また、最終日の最後のセッションでは、私が微生物群集呼吸活性の測定に用いているin vivo ETSA手法を確立されたスウェーデンのLinnaeus大学のMartinez Sandra-Garcia博士の発表を観ることができました。本手法は、現在はスペインのLas

Palmas Gran Canaria 大学に所属しているTed Packard教授が約40年前に確立されたin vitro ETSA手法をより簡易的にしたものです。会場にはTed Packard教授も来られており、セッション終了後に2人と会話することができました。2人からは、わからないことがあれば連絡するようにと仰って頂き、さっそく連絡を取り始めています。

今回の会議では連日多岐の領域にわたる多くの発表があり大学院生として、意義のある知識や経験を得るとともに多くの研究者と友好関係を築くことができました。

最後になりましたが、本会議への渡航費用を援助して頂いた海洋未来技術研究会の皆様、心より厚く御礼申し上げます。



アルハンブラ宮殿から見下ろしたグラナダの街並み



## 情報②

# G7 Action Plan on Marine Litter 報告

九州大学応用力学研究所 磯辺 篤彦

2015年2月24-25日にベルリンのドイツ環境省にて開催されましたG7 Action Plan on Marine Litterに出席致しました。

6月のドイツG7サミットにて、海洋漂流ゴミ問題が首脳会議に上がる可能性があり、ドイツ環境省に、G7各国とEU代表、国連環境計画の関連行政官、および研究者が招集され(イタリアのみ欠席)、ワークショップが開催されました。G7では、今回のような事

前会議の決議がシェルパ会議等の上位会議に回され、最終的な首脳会議の議題が選別されていくとのこと、日本からは外務省と環境省から一人ずつ、加えて私の三名が派遣されました。主催国のドイツと、政府(外交担当)+NGO+NOAAで最大の代表団となった米国の強い意気込みが、私には印象的でした。

初日午前中はSharing experience, approaches to tackle marine

litter と題したセッションがあり、漂流漂着ゴミ問題に対する行政的な取り組みや研究について、各国の状況が紹介されました。漂流漂着ゴミの70%は廃プラスチックであって、それらが劣化・細片化したマイクロプラスチックの環境影響が注目を集めるなか、漂流漂着ゴミ問題は、「海洋プラスチック汚染」として認識されつつあります。このような状況で、G7 各国の話題も廃プラスチック問題に終始し、シングルユースのプラスチック規制や、リサイクル、あるいはデポジット制の導入などが紹介されました。莫大な漂着ゴミ回収費用を抛出し続けている日本政府の対策も、十分とは言えないまでも先進的ではありますが、一般市民の広い理解を得たとは言い難く(漂流漂着ゴミは、海水浴客や漁業者が海岸や海で捨てたものと思っている人も)、問題の周知が不足していると感じました。この点、米国の NGO や企業、そして政府が一体となった trash free seas alliance などは、学べき活動として印象に残りました。<http://www.oceanconservancy.org/our-work/trash-free-seas-alliance/>

私は、マイクロプラスチック研究に関して、環境省事業として現在実施中の日本周辺海域での一斉調査や、次年度より私が代表者として環境省推進費で実施させていただく研究プロジェクトを紹介しました。匹敵する研究プロジェクトの紹介は他国からはありませんでしたが、休憩時間中や昼食中に、英国での北海のマイクロプラスチックの輸送モデリングや、フランスで申請中(?)の研究プロジェクトを個人的に紹介され、今後の連携について意見交換を行いました。

初日午後から二日目は、G7 各国が漂流漂着ゴミ問題解決・低減へ向けた行動計画(action plan)を取りまとめました。この行動計画は、その後に G20 を経て発展途上国にも波及して行くものだろうと、それだけに慎重な文言の取り扱いを求められ、多分に行政的なやり取りが続きました。中には、マイクロプラスチックのような新たな「海洋汚染物質」の調査には世界共通のプロトコルが必要であって、G7 としてこの策定を推進していくといった議論もありました。行動計画は、現在、北海周辺各国が取り組んでいる OSPAR を基盤にして策定されましたが、これまでの日本の取り組みにも十分に沿ったものであるように見受けられました。<http://www.ospar.org>

海洋プラスチック汚染問題には最近になって多くの研究者が参入し、たとえばマイクロプラスチックをキーワードにした研究論文だけでも、現在では週1編のペースで、世界のどこかの IF 付ジャーナルに発表されている状況です。ただ、国際ジャーナルに査読論文を出すといった(サイエンスとして当たり前の)水準で見れば、日本の研究者の層は極めて薄いと云わざるを得ません。G7 サミットに議案として上ることが検討されるとは、世界的に需要が高いということでしょう。我が国でも多くの研究者がこの問題に目を向け参入されることを願って、海洋学会 NL に投稿させていただいた次第です。Marine Pollution Bull の most downloaded articles にも挙げている Derraik(2002)や Andrady(2011)のレビューなどは、最初に読むべきレビューとしておすすめだと思います。<http://www.journals.elsevier.com/marine-pollution-bulletin/>



### 情報 ③

## 新学術領域研究「気候系の hot spot」: 若手研究者連絡会活動報告

北海道大学大学院理学研究院 佐々木 克徳 / 東京大学先端科学技術研究センター 西井 和晃 / 名古屋大学地球水循環研究センター 吉岡 真由美

文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究「気候系の hot spot: 熱帯と寒帯が近接するモンスーンアジアの大気海洋結合変動」が平成 22-26 年度までの 5 年間行われました。このプロジェクトは中村尚東京大学教授を領域代表に 9 つの研究班と 15 の公募研究から成り、中高緯度での大気海洋相互作用の理解がメインターゲットでした。本稿では、このプロジェクト内の若手研究者(助教・ポスドク)・学生による若手研究者連絡会 (Young Hot Spotters: 以下 YHS) の 5 年間の活動について報告させていただきます。プロジェクトについては日本地球惑星科学連合ニュースレターの解説 (<http://www2.jpogu.org/publication/jgl/JGL-Vol8-4.pdf>) をご参照ください。

YHS は東大・先端研の西井と北大・理の佐々木を代表に、プロジェクトに参加している大学・研究所の若手研究者・学生により構成されており、設立時は 8 つの組織から 25 人が参加、5 年間で増減があるものの概ね 20-30 人が参加していました。YHS の活動は、若手研究者や学生が同世代の視点での研究への意見交換や議論、交流をする場と機会を設けることで、次世代の研究を担う者同士が相互に協力しつながり深めることを目的としていました。内部の活動として、年に 1 度、若手研究者のみの合宿を行い(写真 1)、研究についての議論し研究計画の立案やプロジェクトへの提言を行いました。若手で立案した研究計画の詳細はここでは述べませんが、本プロジェクトでは主眼が置かれなかった地球温暖化に関しても議論が行われ、温暖化に伴う海面水温上昇や海水減少は大気

への熱放出を増加させ、将来ますます中高緯度での大気海洋相互作用の研究が重要になるだろうことが話し合われました。その他、博論・修論の共有やプロジェクトの全体会議での学生ポスター賞、プロジェクト内でのデータ共有のためのサーバー管理を行いました。また対外的な活動として、プロジェクトのウェブページにおいて船舶観測や学会への参加報告や、プロジェクトに関連した用語集の作成を行いました。

プロジェクトの後半には研究成果を社会へ発信すべく、教員や大学生向けの講演会「海と大気のはなし」を企画し、第 1 回は平成 25 年 12 月に岩手大で、第 2 回は平成 27 年 1 月に東北大で開催しました。ともに県と市の教育委員会の後援を頂き、第 2 回の講演会では日本海洋学会と日本気象学会にも後援に入っていました。講演者の半数を YHS の若手研究者が務めたほか(写真 2)、講演会に参加した本プロジェクトの学生が聴講者のさらに若い世代の学生と交流し、観測や研究についての体験や意見を紹介する場面もありました。

YHS の特色の 1 つは海洋と気象の両方の若手が所属していることです。YHS の活動以外にも、多くの若手が船舶観測や学会に参加し交流を深めました。この YHS のような若手主体の活動をプロジェクト予算申請時に研究体制にあらかじめ組み込むことは珍しい試みと思いますが、若手研究者・学生の積極的な参加とプロジェクトからのサポートの下、充実した活動を行うことができました。プロジェクトは平成 26 年度で終了し、YHS の活動も同時に終了しま



したが、この活動を通じ築かれた横の繋がりはこれからの研究にも生かされるものと思います。YHS 活動の詳細やプロジェクトに

ついて興味を持たれた方はウェブページ(<http://www.atmos.rcast.u-tokyo.ac.jp/hotspot/>)をご参照ください。



写真1 合宿の集合写真



写真2 「海と大気のはなし」の講演の様子



#### 情報④

### サッカー in 海洋学会

東京大学大気海洋研究所 岡 英太郎 / 東京海洋大学 橋濱 史典 / 長崎大学 万田 敦昌

周囲の学会では色々で行われているのに何故か海洋学会では今までなかった、サッカー大会。昨年秋の長崎学会でミニ大会を行ったのに続き、今回の春季大会では東京海洋大のグラウンドをお借りして、前日(3月21日)の15時から初の本格的なサッカー大会を開催しました。メールでの呼びかけに応じて集まってくれたプレイヤーは21名。東京海洋大のサッカー愛好者12名を加えた33名で、最初はアップを兼ねてハーフコートで、続いてフルコートでゲームを行いました。サッカーは10年ぶりという人から毎日欠かさない人まで、運動頻度もレベルも年齢(22歳-54歳!)も様々でしたが、皆で1つのボールを追いかけて、よい汗を流しました。

幸い一人の怪我人も出ずに無事終了、19時からは品川駅近くの居酒屋にフィールドを移し、世代、研究分野の垣根を越えて交流を深めました。

ご参加頂いた皆さんから楽しんだという声を多く頂いたことから、次大会以降も是非企画していきたいと思っています。今後は徐々にレベルを下げ、普段サッカーとは縁遠い人でも気軽に参加できるようにしていくつもりですので、興味のある方、海洋学会サッカーメーリングリストには是非ご登録ください(岡 [eoka@auri.u-tokyo.ac.jp](mailto:eoka@auri.u-tokyo.ac.jp) までご連絡お待ちしております)。



#### 情報⑤

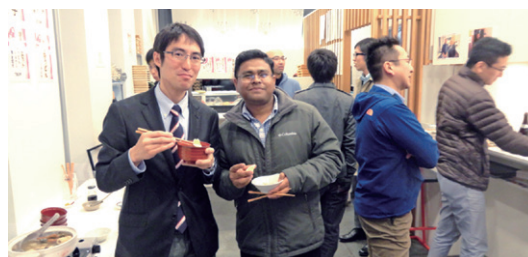
### 海洋生態系モデリング研究集会開催報告

東京大学大気海洋研究所 伊藤 幸彦

2015年3月4、5日に東京大学大気海洋研究所共同利用研究集会「海洋生態系モデリングの最前線：成果、連携、次世代への展開」(コンビナー：山中康裕・北海道大学教授)が開催されました。大学、独立行政法人、国立研究所、都道府県水産試験場、民間会社等から2日間でのべ102名が参加し、低次から高次、沿岸から外洋まで様々な切り口の海洋生態系モデルとそれに関わる知見について、海洋研究各分野で活躍する研究者からの発表と議論がなされました。気候変動・魚類生産、環境評価、モデル開発というセッションで計13題の口頭発表があったほか、ポスターでも様々なテーマで14題の発表がありました。また、研究成果発表のほかに、開発者からエンドユーザーまで含めた海洋生態系モデリングコミュニティの相互理解、情報共有、次世代の育成、機関の枠を超えた教育・人材交流について活発な議論が行われました。

本研究集会は今後も継続予定で、2015年度は11月に東京大学大気海洋研究所で開催予定です。また、海洋生態系モデリングに関わる成果発信という視点で計画されている地球惑星科学連合大

会海洋生態系モデリングセッション(2015年大会、セッション名A-OS23、幕張メッセにて5月24日開催、共同コンビナー：伊藤進一東大教授、平田貴文北大特任准教授)とも連携しています。集会世話役とJpGUコンビナーは、海洋生態系モデルに関わる連携や開発、活用を発展させていくため、メーリングリストやホームページの立ち上げ、発表スライドを含む資料の共有を進めています。ご興味のある会員はぜひご連絡ください。



お魚倶楽部「はま」での懇親会



## 情報⑥

# 「若手武者修行セミナー」開催報告

東北大学 杉本 周作 / 東京大学 永井 平 / 海洋研究開発機構 木田 新一郎 森岡 優志

博士課程の学生やポスドク研究員が所属研究機関以外でセミナー発表を行うプロジェクト「若手武者修行セミナー」を2014年度より立ち上げました。これは、「日本海洋学会若手集会助成」を中心に、所属機関以外でのセミナー発表を行ってみたい若手研究者を募り、応募者の訪問希望先を中心にセミナー開催の受け入れ先を仲介するプロジェクトです。学会発表や所属機関・プロジェクト内での活動とは違った形で学外、専門外の教員・研究者と接する機会をつくり、研究発表・フィードバックを得ながら他機関との人材交流を行う目的で活動しています。2014年度実施した5件の「武者修行セミナー」についてご報告します。

東京海洋大学の君塚政文さん(博士課程)は、海洋研究開発機構で北太平洋亜熱帯循環系の風成循環に関する発表を行いました。「セミナー後も、循環系のプロと深く議論することができ、新たな見解を得ることができた」と言っておられました。京都大学の仁科慧さん(博士課程)は、九州大学応用力学研究所で黒潮続流域における流速データ同化の有効性について発表を行いました。「普段の研究室ゼミでは出てこない質問やコメントをいただき、とても有意義なセミナーとなった」そうです。また、東海大学の日原勉さん(博士課程)は、海洋研究開発機構で北太平洋における海面水温の半年周期変動について発表を行い、「普段とは異なる研究の議論にとても刺激を受け、学位取得に向けより一層研究に励む気になった」と熱い感想を寄せてくれました。国立極地研究所の照井健志さん(特任研究員)は、愛媛大学沿岸環境科学研究センターで北極域データアーカイブの取組について発表を行い、「自身の研究を振り返るセミナーとなり、将来の研究に向けて貴重な経験ができた」と言っておられました。最後に、東京大学の片岡崇人さん(博士課程)は、北海道大学でニンガルー・ニーニョに関する発表を行い、「研究者との議論

を通して、自身の研究にだけでなく、研究そのものに対する考え方や姿勢についてとても勉強になった」とまで言ってくれました。

受け入れ研究機関・研究者の方からも、「新進気鋭の若手を深く知ることができ、その最新の取り組み内容を学ぶことができ、とても有益だった」とありがたい言葉を頂戴しています。今後も、海洋学会全体が、博士課程の学生やポスドクなど若手研究者を支援する環境を“継続”させ、若手同士がその体験を共有することで“縦と横の連携”を強化し、“人材の流動性”を高めていくことを強く期待しています。研究発表された方々のレポートは、こちらのホームページでご覧になれます(<http://tamatsu.dip.jp/kaiyowakate/>)。この武者修行セミナーは、2015年度も実施する予定でおります。そこで、武者修行セミナーをしてみたい方・興味を持たれた若手研究者からのご連絡をお待ちしています([jos\\_wakate\\_seminar@googlegroups.com](mailto:jos_wakate_seminar@googlegroups.com))。

最後になりますが、「日本海洋学会若手集会助成」のご支援により、「武者修行セミナー」を実施できたことを厚く御礼申し上げます。そして、若手研究者を快く受け入れてくださった各研究機関・研究者の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。



武者修行セミナーの様子(国立極地研究所の照井健志さんの例)



## 情報⑦

# 九州大学応用力学研究教員の公募

九州大学応用力学研究所では、この度、教員を下記の通り公募することになりました。なお、九州大学応用力学研究所概要および公募の詳細につきましては、<http://www.riam.kyushu-u.ac.jp/public/jobs.html> をご覧ください。

### 1. 公募人員：准教授 1名

平成14年度より研究所は全教員に任期制(任期5年 再任可)を採用しています。

### 2. 所属部門：九州大学応用力学研究所・東アジア海洋大気環境研究センター

### 3. 専門分野、仕事の内容：

大気海洋境界面の物理過程や、境界面を通じた物質や熱・

運動量の輸送・交換過程の研究を主導する意欲があり、東アジア域の海洋大気環境研究にも貢献できる方。さらに、全国共同利用・共同研究ならびに国際共同研究にも積極的な取り組みが期待できる人が望ましい。なお、九州大学大学院総理工学府大気海洋環境システム学専攻の協力講座も担当する。

### 4. 着任時期：決定後なるべく早い時期

### 5. 応募締切：平成27年7月31日(金)17時必着

### 6. 書類送付先・問合せ先：

〒816-8580 福岡県春日市春日公園6-1

九州大学応用力学研究所 磯辺篤彦

Tel : 092-583-7726 Fax : 092-573-1996

E-mail : [aisobe@riam.kyushu-u.ac.jp](mailto:aisobe@riam.kyushu-u.ac.jp)



**26<sup>th</sup> IUGG General Assembly**

日程：2015年06月22日(月)–07月02日(木)  
会場：Prague Congress Centre (Prague, Czech Republic)  
ウェブサイト：<http://www.iugg2015prague.com/>

**第43回可視化情報シンポジウム**

日程：2015年07月21日(火)–22日(水)  
会場：工学院大学 新宿キャンパス(東京都新宿区)  
ウェブサイト：<http://www.visualization.jp/event/detail/symp2015.html>

**AOGS 12<sup>th</sup> Annual Meeting**

日程：2015年08月02日(日)–07日(金)  
会場：Suntec Singapore Convention & Exhibition Centre (Suntec, Singapore)  
ウェブサイト：<http://www.asiaoceania.org/aogs2015/>

**2015年夏のGFDセミナー「海洋中の内部重力波」**

日程：2015年08月17日(月)–20日(木)  
会場：休暇村支笏湖(北海道千歳市)  
ウェブサイト：<https://www.gfd-dennou.org/seminars/gfdsemi/>

**2015年海洋データ同化夏の学校**

日程：2015年08月19日(水)–22日(土)  
会場：青森県むつ市

**SOLAS Open Science Conference 2015**

日程：2015年09月07日(月)–11日(金)  
会場：Auditorium Maximum, University of Kiel (Kiel, Germany)  
ウェブサイト：<https://www.confmanager.com/main.cfm?cid=2778>

**水文・水資源学会 2015年度総会・研究発表会**

日程：2015年09月09日(水)–11日(金)  
会場：首都大学東京 南大沢キャンパス(東京都八王子市)  
ウェブサイト：<http://www.comp.tmu.ac.jp/jshwrmtmu/>

**雪氷研究大会(2015・松本)**

日程：2015年09月13日(日)–16日(水)  
会場：信州大学理学部(長野県松本市)  
ウェブサイト：<https://sites.google.com/site/2015jcsir/>

**ICES Annual Science Conference 2015**

日程：2015年09月21日(月)–25日(金)  
会場：DGI Byen (Copenhagen, Denmark)  
ウェブサイト：<http://ices.dk/news-and-events/asc/ASC2015/Pages/ASC2015.aspx>

**平成27年度日本水産学会秋季大会**

日程：2015年09月22日(火)–25日(金)  
会場：東北大学 川内キャンパス(仙台市青葉区)

**日本流体力学会 年会 2015**

日程：2015年09月26日(土)–28日(月)  
会場：東京工業大学 大岡山キャンパス(東京都目黒区)  
ウェブサイト：<http://www2.nagare.or.jp/nenkai2015/>

**2015年度日本海洋学会秋季大会**

日程：2015年09月26日(土)–30日(水)  
会場：愛媛大学 城北キャンパス(愛媛県松山市)  
ウェブサイト：<http://www.jp-c.jp/jos/2015FM/>

**11<sup>th</sup> International Conference on Southern Hemisphere Meteorology and Oceanography (11ICSHMO)**

日程：2015年10月05日(月)–09日(金)  
会場：Facultad de Ciencias Físicas y Matemáticas, Universidad de Chile (Santiago, Chile)  
ウェブサイト：<http://www.icsmo-2015.com>

**Workshop on CMIP5 Model Analysis and Scientific Plans for CMIP6**

日程：2015年10月20日(火)–23日(金)  
会場：Hotel Excelsior (Dubrovnik, Croatia)  
ウェブサイト：<http://embracecmip2015.sciencesconf.org>

**2<sup>nd</sup> Open Science Symposium on Western Pacific Ocean Circulation and Climate**

日程：2015年10月26日(月)–28日(水)  
会場：Paradise Hotel Busan (Busan, Korea)  
ウェブサイト：<http://oss2015.wix.com/join>

**日本気象学会 2015年度秋季大会**

日程：2015年10月28日(水)–30日(金)  
会場：京都テルサ(京都市南区)

**第6回極域科学シンポジウム**

日程：2015年11月16日(月)–19日(木)  
会場：国立極地研究所・統計数理研究所・国立国語研究所(東京都立川市)  
ウェブサイト：<http://www.nipr.ac.jp/symposium2015/>

**2015 AGU Fall Meeting**

日程：2015年12月14日(月)–18日(金)  
会場：Moscone Center (San Francisco, USA)  
ウェブサイト：<http://fallmeeting.agu.org/2015/>

**2016 Ocean Sciences Meeting**

日程：2016年02月21日(日)–26日(金)  
会場：Ernest N. Morial Convention Center (New Orleans, USA)  
ウェブサイト：<http://meetings.agu.org/meetings/os16/>

**2016年度日本海洋学会春季大会**

日程：2016年03月14日(月)–18日(木)  
会場：東京大学 本郷キャンパス(東京都文京区)

**EMECs 11-SeaCoasts XXVI Joint Conference: Managing Risks to Coastal Regions and Communities in a Changing World**

日程：2016年08月22日(月)–27日(土)  
会場：Park Inn Pribaltiyskaya Hotel (St. Petersburg, Russia)  
ウェブサイト：<http://www.emecs-sc2016.com>

# 溶存酸素ロガー

新発売

仕様	溶存酸素 (DO) ロガー
モデル	U26-001
測定範囲	0~30mg/L
校正範囲	0~20mg/L, 0~35°C
精度	0.2mg/L (0~8mg/L測定内) 0.5mg/L (8~20mg/L測定内)
分解能	0.02mg/L
センサータイプ	蛍光式
センサーキャップ寿命	6ヵ月 (初期化後7ヵ月), 交換可
記録容量	21,700サンプル (DO+温度セット)
記録間隔	1分~18時間
最大使用深度	100m
寸法/重量	3.96cmφ×26.7cm長/464g
内蔵バッテリー/寿命	3.6V リチウム/3年 (代表的使用にて)



溶存酸素 (DO) ロガー

## 電気伝導率 (塩分)



電気伝導率 (塩分) ロガー

仕様	電気伝導率ロガー
モデル	U24-001
計測範囲 (校正) - 導電率	① 0~1,000 μS/cm ② 0~10,000 μS/cm
〃 (〃) - 温度	5~35°C
精度 (校正範囲内) - 導電率	読値の3% 又は5 μS/cm (大きい方)
〃 (校正範囲内) - 温度	0.1°C
記録容量 (導電率+温度セット)	1範囲指定:18,500 2範囲指定:11,800
最大使用深度/動作温度	70m/0~50°C
寸法/重量	3.18cmφ×16.5cm長/193g
内蔵バッテリー/寿命	3.6V リチウム/3年

## 水位ロガー (廉価モデル)



水位ロガー

仕様	水位ロガー (淡水・海水兼用)		
モデル	U20L-01	U20L-02	U20L-04
計測範囲	9m	30m	4m
精度	±0.1%FS (±1cm)	±0.1%FS (±3cm)	±0.1%FS (±0.4cm)
本体材質	ポリプロピレン		
内蔵温度センサー仕様 (共通)			
計測範囲	-20°C~50°C		
精度	±0.44°C (0~50°C)		
分解能	0.1°C@25°C		
記録容量	21,700サンプル (圧力+温度セット)		

※従来モデルもあります

姉妹品: 気温、湿度、照度、電圧、電流、光量子、日射、風向、風速、土壌水分、気圧、CO<sub>2</sub>、雨量、パルス他

製造者 米国オンセット コンピューター社

総代理店 **パシコ貿易株式会社**

〒113-0021 東京都文京区本駒込6丁目1番21号コロナ社第3ビル

TEL:03-3946-5621(代) FAX:03-3946-5628

URL: <http://www.pacico.co.jp> E-mail: [sales@pacico.co.jp](mailto:sales@pacico.co.jp)



情報 ⑨

## Journal of Oceanography 目次

# Journal of Oceanography

Volume 71 • Number 2 • April 2015

### EDITORIAL

Message from the new Editor-in-Chief

J. Ishizaka 161

### ORIGINAL ARTICLES

Evidence of equatorial Rossby wave propagation obtained by deep mooring observations in the western Pacific Ocean

K.L. Priya · P. Jegathambal · E.J. James 163

Spatiotemporal changes in meiofaunal composition on soft substrates in the semi-enclosed inner section of the northern Yatsushiro Sea

M. Shimanaga · A. Maenaka · T. Misonou · T. Masuda · Y. Henmi 177

Delayed responses of the oceanic Beaufort Gyre to winds and sea ice motions: influences on variations of sea ice cover in the Pacific sector of the Arctic Ocean

E. Yoshizawa · K. Shimada · H.K. Ha · T.W. Kim · S.H. Kang · K.H. Chung 187

### SHORT CONTRIBUTIONS

Estimation of the global air-sea CO<sub>2</sub> gas flux considering wave breaking

N. Suzuki · M.A. Donelan · S. Komori · N. Takagaki 199

Improvement of New Generation Sea Surface Temperature for Open ocean (NGSST-O): a new sub-sampling method of blending microwave observations

K. Hosoda · H. Kawamura · F. Sakaida 205

Effect of nutrient release from sea floor on Si:P ratio in the Buzen-Kai, western Seto Inland Sea, in summer

K. Abe · M. Tsujino · N. Nakagawa · K. Abo 221



情報 ⑩

## Oceanography in Japan 「海の研究」目次

### 第 24 卷 2 号 (2015 年 3 月)

2014 年度日本海洋学会岡田賞受賞記念論文

海水の生成と融解が極域海洋の物質循環に与える影響

野村 大樹 51

2014 年度日本海洋学会学会賞受賞記念論文

海洋における植物プランクトンの生理生態と物質循環における役割に関する研究

古谷 研 63

〔訂正〕

統計的手法を用いた黒潮流路変動解析

吉田 次郎 · 前田 恵理子 · 中野 知香 · 出口 大貴 · 根本 雅生 77

### 第 24 卷 3 号 (2015 年 5 月)

〔総説〕

日本によるアジアにおける海洋研究 — WESTPAC 設立 25 年の活動を中心に —

安藤 健太郎 · 岩滝 光儀 · 植松 光夫 · 大野 浩史 · 北沢 一宏 · 小松 輝久 · 鈴木 敏之 · 勢田 明大 · 西田 周平 · 福代 康夫 · 松野 健 · 道田 豊 · 森本 昭彦 79

2014 年度日本海洋学会岡田賞受賞記念論文

海水生産量のグローバルマッピング及び深層水形成域の特定と変動解明

田村 岳史 109



## 学会記事 ①

# 『2015年度日本海洋学会 秋季大会』開催通知

愛媛大学沿岸環境科学研究センター 郭 新宇

日本海洋学会 2015 年度秋季大会及び付帯行事を以下の予定で開催します。

### 1. 大会実行委員会

委員長：武岡 英隆(愛媛大学沿岸環境科学研究センター)  
事務局長：郭 新宇(愛媛大学沿岸環境科学研究センター)  
問い合わせ先：愛媛大学沿岸環境科学研究センター  
〒790-8577 愛媛県松山市文京町2-5  
電話：089-927-9824 Fax: 089-927-9846  
Eメール：jos2015fall@gmail.com

### 2. 日程

大会期日：2015年9月26日(土)～9月30日(水)  
研究発表：2015年9月27日(日)～9月29日(火)

### 3. 会場

愛媛大学城北キャンパス 〒790-8577 愛媛県松山市文京町3  
アクセス

#### ●松山空港から JR 松山駅、松山市駅まで 伊予鉄バスをご利用の場合

JR 松山駅まで：空港リムジンバス「JR 松山駅前」下車  
松山市駅まで：空港リムジンバス「松山市駅」下車

#### ●JR 松山駅から愛媛大学城北キャンパスまで 伊予鉄道市内電車をご利用の場合

環状線(古町方面行き)：「赤十字病院前」下車、北へ徒歩  
約2-5分

#### 伊予鉄バスをご利用の場合

東西線「愛媛大学前」下車(大学本部へは「護国神社前」  
下車)

#### ●松山市駅から

#### 伊予鉄道市内電車をご利用の場合

環状線(大街道方面行き)：「赤十字病院前」下車、北へ徒  
歩約2-5分

### 4. 懇親会

日時：2015年9月28日(月) 18:30-20:30  
場所：道後温泉大和屋本店

### 5. 大会参加および研究発表申し込みの手順

今大会では、大会参加費に要旨集代(1冊)を含んでいます。希望に応じて要旨集を事前郵送(送料無料)または会場受付でお渡しします。

大会参加資格および研究発表資格は以下のとおりです。

- 大会にはどなたでも参加できますが、大会参加費は会員と非会員で異なります。
- 大会での研究発表は、大会受付時に個人としての会員資格を有する方に限ります(入会申請中の者を含む)。この資格を有する方には、通常会員、学生会員、賛助会員、名誉会員、特別会員、または終身会員資格のいずれかの区分の会員である個人が該当します。ただし、団体会員または賛助会員である団体に所属する方の場合は、1団体につき1名に限り個人としての会員資格を有しない方でも発表できるものとします。
- 団体会員または団体としての賛助会員の大会参加については、1団体につき2名までは通常会員と同じ参加費です。3人目以降は非会員と同じ参加費になります。

各種申し込みは大会参加事前登録ページにて、次の1)から4)

の項目に従って行ってください。

#### 1) 大会参加の申し込み

[受け付け期間：2015年6月15日(月)～2015年9月7日(月)]  
2015年9月8日(火)以降は、会場での受付のみとなります。

大会参加事前登録ページにおいて、新規に「ログインユーザー登録」することで参加の申し込みを行います。参加者IDを半角英数字4文字以上16文字以内で任意に設定し、指示に従って申し込みをしてください。参加者IDは、参加費振込や要旨集原稿送付の際に必要となります。

郵送での申し込みは、原則受け付けていません。やむを得ぬ理由があり、郵送で申し込みたい方は大会実行委員会にお問い合わせください。

学部生は参加費無料で参加できます(懇親会は有料)。学部生の方の参加登録は、大会 Web サイトの「参加申込」から「事前参加登録申込」のページで必要事項を記入の上、「参加費選択」において、「参加する」>「学部生」>「懇親会参加」もしくは「懇親会不参加」を選択してください。Web サイトでの手続き終了後、大会実行委員会(jos2015fall@gmail.com)宛に参加者ID、氏名、所属、および「学部生の参加」の旨を記入したメールをお送りください。

#### 2) 研究発表の申し込み

受け付け期間：2015年6月15日(月)～2015年7月10日(金)

登録した参加者IDとパスワードで大会参加事前登録ページにログインして研究発表の申し込みをしてください。研究発表申し込みは、通常の口頭発表、ポスター発表を通じて1人1題に限りです。

郵送での申し込みは、原則受け付けていません。やむを得ぬ理由があり郵送で申し込みされたい方は、早めに大会実行委員会にお問い合わせください。

#### 3) 要旨集原稿の送付

口頭発表、ポスター発表とも、要旨集原稿の締め切りは2015年7月10日(金)(必着)です。研究発表の申し込みの締め切りと同じです。締め切り後の変更は受け付けません。

要旨集原稿は、研究発表の申し込みページからアップロードして送付してください。ファイルの形式はPDFに限り、ファイル容量は8MB以下としてください。要旨集は白黒で印刷されます。

郵送での原稿送付は、原則受け付けていません。やむを得ぬ理由があり、郵送にて原稿を送付したい方は、早めに大会実行委員会にお問い合わせください。

#### 4) 大会参加費(要旨集代を含む)と懇親会費の振り込み

今大会では大会参加費に要旨集代(1冊)を含んでいます。希望に応じて要旨集を事前郵送(送料無料)または会場受付でお渡しします。

大会参加費、懇親会費は、銀行振込、コンビニエンス・ストア払い、またはクレジットカードにて、2015年9月7日(月)までに前納してください(当日有効)。銀行振込の際には、必ずご本人名(フルネーム)の前に参加者ID(参加申し込み時に Web サイトで設定する)をお付けください。Web サイトからのクレジットカードによるお支払いは、VISA、Master、JCB、AMEX が使用可能です。

2015年9月7日(月)24時に事前参加登録の受付を終了します。

それ以降は Web サイトからのクレジット送金も出来なくなります。直接、大会の受付にて参加費等をお支払いください(前納料金は適用されません)。なお、振込手数料は振込者のご負担ください。また、納付された参加費等は返却いたしません。

費目	大会参加費		懇親会費	
	前納	会場受付	前納	会場受付
会員/納期				
正会員	6,000	9,000	5,000	6,000
学生会員	3,000	4,000	3,000	4,000
学部生	無料	無料	3,000	4,000
非会員	9,000	12,000	5,000	6,000
名誉会員	無料	無料	無料	無料

(単位：円)

- 名誉会員は大会参加費と懇親会費が無料です。要旨集は贈呈いたします。
- 特別会員と賛助会員(個人)は通常会員と同じ扱いです。
- 学部生(会員・非会員問わず)の参加費は無料ですが、懇親会費は有料(学生会員と同額)といたします。大学院生・研究生の参加費は有料です。ご注意ください。
- 団体会員または団体としての賛助会員の大会参加については、1 団体につき 2 名までは通常会員と同じ参加費です。3 人目以降は非会員と同じ参加費になります。懇親会のみ参加も可能です。
- 大会参加者が要旨集を追加購入する場合は 1 冊 3,000 円です。
- 大会に参加せずに要旨集のみを購入する場合は、送料込みで 1 冊 3,500 円です。

銀行振込の場合は下記へお願いします。

銀行名：伊予銀行

口座種類：普通

支店名：一万支店(読みイチマンシテン)

口座番号：1922797

口座名義：日本海洋学会 2015 年秋季大会実行委員会

(ニホンカイヨウガッカイ 201)

※フリガナは長すぎるため切れていますのでご注意ください

## 5) 要旨集原稿の作成要領

- 研究の目的、方法、結果、解釈などを、わかりやすく書いてください。
- 要旨集原稿は『A4 判 1 枚』とし、これを原寸大で印刷します。
- 要旨集原稿は作成上の注意事項を参照して作成してください。
- 手書きでの原稿は原則として認めません。どうしても手書きを望む方は、書き直しをお願いする場合がありますので早めに送付してください。
- Web による講演申込の際、「講演題目」、「講演者」に続いて、「発表内容の抄録」を提出していただくことになっています。日本語全角で 300 文字以内(半角英数字は 0.5 文字扱い)です。この「抄録」は、通常の講演要旨とは別に作成していただくもので、JST(科学技術振興機構)が管理する文献データベースに登録されます。

## 6) 発表形式および制限

- 研究発表は一会員につき一題に限ります。
- 会場には、Power Point と Acrobat Reader をインストールした PC (Windows および Mac) を用意します。発表ファイルは USB フラッシュメモリーもしくは CD-R でご用意ください。特殊な機材(OHP 等)やアプリケーションソフトの使用を希望する方は、研究発表申し込み時に大会実行委員会に申し出てください。
- 発表形式は、口頭またはポスターのいずれかを選んでください。大会実行委員会では、発表申込者の希望に添うように努力しますが、プログラム編成上の都合により発表形式の変更を求める

ことがあります。

- 口頭発表の時間は、討論も含めて 15 分程度の見込みです。
- ポスター発表では、会期中に 2 時間程度のポスター会場での立ち会い説明時間を用意します。ポスターの大きさは横 90cm × 縦 120cm 程度です。なお、口頭による内容紹介は行いません。

## 7) ベストポスター賞

今大会では、若手研究者を励ます一助として、学生会員または若手通常会員が立会説明を行ったポスター発表の中から **3 件** を選考し、ベストポスター賞を授与します。大会期間内に授賞式を挙行するとともに、後日、受賞者の氏名等を学会ホームページと学会ニュースレターで公開します。なお、今大会での若手通常会員とは、2015 年 9 月 1 日時点で博士の学位を未取得または取得後 3 年未満であることを一応の目安として、研究発表申込時にベストポスター賞の審査対象となることに同意した通常会員とします。

## 6. シンポジウム

従来の大会と異なり、シンポジウム等の申し込み受け付けは、日本海洋学会事務局が行います。大会実行委員会では、申し込みは受け付けませんので、ご注意ください。

### 1) 日程等

2015 年 9 月 26 日(土)と 30 日(水)にシンポジウム等を開催することを予定しています。9 月 27 日(日)および 29 日(火)の夕刻に 2 時間程度のナイトセッションを開催することも可能です。申込件数の多い場合は、複数のシンポジウム等を並行して行います。また、会場の制約およびプログラムの編成の都合で一部のシンポジウム等の実施を本大会会場以外でお願いすることもあります。

### 2) 申し込み

2015 年度秋季大会シンポジウム等(日本海洋学会共催を含む)の開催を希望する個人または団体・機関は、下記の項目を明記して **2015 年 6 月 12 日(金)必着で日本海洋学会事務局** に E メール(申請者名をファイル名とした添付ファイル)または郵送(「シンポジウム申込」と朱書きのこと)で申し込んでください。締め切り期日を過ぎてからの申し込みは受け付けません。

送付先：日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F

(株)毎日学術フォーラム内

E メール：jos@mynavi.jp

- **表題**：シンポジウム等の名称
  - **主催・共催**：主催者を記載してください。日本海洋学会および日本海洋学会の研究会以外の団体・機関などが主催するシンポジウムは日本海洋学会との共催が必要ですので、日本海洋学会との共催を申請する旨、明記してください。
  - **コンビーナー**：氏名と所属を記載してください。
  - **連絡先**：シンポジウム等開催責任者として事務的な連絡が取れる方の氏名・電話・メールアドレスなどを記載してください。
  - **趣旨**：簡潔にシンポジウム開催の趣旨を記載してください。
  - **開催希望日時**
  - **必要とする会場の広さ**(参加予定者数)、機材等
  - 日本海洋学会大会期間中にシンポジウムとして開催する必要性および意義について記載してください(自由形式)
- 日本海洋学会幹事会では、申し込みのあったシンポジウム開催案について、
- 1) 通常発表枠(本大会)での開催が困難か?
  - 2) 全体討論の時間を確保する必要があるか?
  - 3) 複数ある研究航海の有機的な連携やプロジェクト研究成果の取りまとめなど、発表者に少なくない人数の非会員の参加があるか?

などの点を考慮し、必要に応じてシンポジウム等の代表者と相談の上、採否および日時・会場等を決定します。なお、採否は6月下旬を目処に日本海洋学会事務局よりお知らせします。

### 3) プログラムと講演要旨の送付

シンポジウム等の開催責任者は、シンポジウム等のプログラムを**2015年7月10日(金)までに**日本海洋学会事務局に送付してください。また、講演要旨を要旨集に掲載する場合は、5.5)の要旨集原稿の作成要領に従って原稿を作成し、シンポジウム等開催責任者がとりまとめ、プログラムと併せて日本海洋学会事務局に送付してください。

## 7. その他

### 1) 宿泊

大会実行委員会では、宿泊の斡旋はいたしません。

### 2) 一時保育

本大会に参加するために一時保育施設を利用する会員には、下記のとおり大会実行委員会が保育料等の一部を補助します。

- 大会参加会員一人につき最高限度額4万円までの一時保育料等を補助します。
- 一時保育先の所在地は、市町村を問いません。
- 本制度を利用予定の会員は、事前に大会実行委員会にご連絡ください。
- 補助金請求は、領収書を大会実行委員会に提出することにより

ます。

希望する会員には、大会実行委員会が業者に依頼して大会会場近く(愛媛大学内)に一時保育施設を設けます。大会実行委員会がお知らせする詳細をご確認の後、**7月10日(金)まで**にお申し込みください。大会実行委員会は、業者が運営する一時保育施設における事故などについて責任を負いません。

一時保育施設概要

対象：生後6ヵ月～12歳

開園時間：08:30～17:30

一時保育料：1時間毎に3,450円(保育士2名分の時間給)。ただし、利用者の人数で分割。たとえば6名の場合は、その6分の1で575円。その他、おやつ代、製作費代(別途必要)。

送迎：無

住所：愛媛大学内

### 3) 賛助・展示・広告の募集

大会実行委員会では、本大会に賛助、機器・書籍などの展示、および講演要旨集に広告を掲載していただける、企業・団体を募集します。また、研究プロジェクト等のアウトリーチのための展示も合わせて募集します。締め切りは**2015年7月10日(金)**です。詳細は大会実行委員会にお問い合わせください。



## 学会記事 ②

# 日本海洋学会 2015年度 春季大会報告

大会実行委員会事務局長 矢野 敏彦

大会日程：2015年3月21日(土)～3月25日(水)  
 大会会場：東京海洋大学品川キャンパス  
 大会実行委員会委員長：横山 辰夫(気象庁 地球環境・海洋部)  
 副委員長：寄高 博行(海上保安庁 海洋情報部)  
 事務局長：矢野 敏彦(気象庁 地球環境・海洋部)

## 1. 参加者

526名(内、学部生22名)ただし、シンポジウムのみの参加者は含まない。

内訳：事前申込者454名、当日受付者72名  
 会員種別：通常会員379名、学生会員(大学院生)105名、学部生22名、名誉会員3名、その他20名

## 2. 発表件数

239件  
 口頭発表172件(内、学生会員49件)、ポスター発表67件(内、学生会員25件)。加えて、8件のシンポジウムと3件のナイトセッション。

## 3. 参加費等(括弧内は、前納の場合)

参加費(講演要旨集1冊込)	通常会員	10,000円(7,000円)
	学生会員	4,000円(3,000円)
	学部生	無料
	名誉会員	無料
懇親会費	通常会員	6,000円(5,000円)
	学生会員	4,000円(3,000円)
	学部生	4,000円(3,000円)
	名誉会員	無料

講演要旨集(送料込)	大会参加者	4,000円
	大会不参加者	4,500円

今回も大会参加費には、講演要旨集代を含め、申込み時の希望に応じて、講演要旨集を事前に受け取るか、会場で受け取るかを選択できるようにしました。今大会では、講演要旨集を従来からの冊子に加え、デジタルデータを収録したUSBフラッシュメモリ版でも作成しました。このUSBメモリには、学会のシンボルマークおよび大会のロゴを印刷しました。なお、パスワード発行によりダウンロードする方法も可能なので、今後の大会ではどの方法を選択するか検討いただきたいと思います。

## 4. 収支決算

【収入】	(単位：円)
参加費収入(要旨集含む)	3,409,500
懇親会費	1,423,000
機器展示、広告、賛助会費	2,350,000
大会運営費(学会より)	1,000,000
利息	140
<b>合 計</b>	<b>8,182,640</b>

【支出】	(単位：円)
受付業務委託費(Webページ管理)	470,880
講演要旨集(冊子印刷代)	660,960
講演要旨集(USBメモリ作成費)	1,020,600
決済業務費(クレジット会社手数料等)	181,223



懇親会費	1,200,000
会場使用料(大学会館、教室、ボイラー)	511,452
会場設営費(ポスターパネルレンタル等)	590,760
人件費(学生アルバイト、交通費等)	414,350
運営経費(PC・プリンタ・携帯レンタル、茶菓等)	547,239
消耗品費(名札、ラベル、文房具等)	115,143
保育施設使用料補助	11,150
大会運営費の返納(事務局要旨集購入代(10冊分)、委員会等教室使用料を除く)	949,000
学会への寄付	1,509,883
<b>合 計</b>	<b>8,182,640</b>

## 5. 経過報告

2015年3月21日から25日の5日間、東京海洋大学品川キャンパスを会場として、日本海洋学会2015年度春季大会を開催しました。大会運営にあたっては、気象庁地球環境・海洋部および海上保安庁海洋情報部に所属する海洋学会員が担当しました。会場の東京海洋大学の会員のみならず、会場予約やアルバイト学生の募集などに便宜を図っていただき、また前回・前々回の大会運営に当たられた長崎大学および海洋研究開発機構の会員のみならず、受付用Webページ、オンライン決済の引き継ぎ、会場設営等にご協力をいただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

今回の大会参加者数は526名、講演数は239件で、昨年の春季大会より参加者数は15名減となりましたが、講演数は14件増加していました。これは、ポスター発表の件数が増加したことによります。1月9日の講演申込み締切時に参加申込のあった270名のうち、約30名の会員資格を確認できず、参加申込者全員に会員でなければすぐに入会手続きをするようにメールを送付しました。また、会員資格が確認できなかった申込者の大部分が学生であったので、学会メーリングリストを通じて、指導教官に対して学生に入会申請を促すように注意喚起しました。学会への入会は、学会ホームページをみて学会事務局に申請するよう案内したにもかかわらず、大会実行委員会に対して入会申請や会員資格確認を行うケースが相次いだので、注意していただきたいと考えます。

今回の大会では、シンポジウムの受付や委員会等の弁当の手配については、幹事会(学会事務局)にお願いし、実行委員会の負担を軽減していただきました。

今大会には、賛助19団体、広告掲載15団体、機器展示27団体の協力を得ることができ、大会運営の貴重な収入となりました。展示については、メーカーだけでなく、東京大学海洋アライアンスや国立極地研究所(ガチャガチャは人気だった模様)からも活動に関する展示がありました。

講演の分野やセッションごとの割り振りを考慮し、口頭発表については4会場を設定しました。発表用のPCは、WindowsとMacの2機種を用意しました。当初は会場の無線LANを使用して、会



場前の講演受付PCで受付けた発表ファイルを発表用PCで開く予定でしたが、転送に時間がかかるなどのトラブルがあり、USBメモリを介して発表ファイルを発表用PCまで移動させました。

今大会では、名札のフォルダを従来からのピン・クリップ付のプラスチックケースから、不織布のフォルダで首から下げるタイプのものに変更しました。不織布の色によって、参加者、スタッフ、展示団体の区別がつけられるようにしました。また、今まで文字だけであった名札には、学会のシンボルマークとロゴをいれました。加えて、懇親会参加の印として、従来の赤丸の代わりに、気象庁のマスコットキャラクター「はれるん」を採用しました。

懇親会は3月23日に大学生協食堂で催し、306名(通常232名、学生74名)が参加し、会場が手狭になるほどでした。若手会員の参加が多く、年長の会員との議論が随所でみられました。

### 「ベストポスター賞」

今大会も、若手研究者を励ます一助として、「ベストポスター賞」を設けました。選考は、学会長、大会実行委員を含む8名の選考委員会において行われ、各委員の投票によって受賞者を決定しました。受賞者は次の3名で、懇親会時に実行委員長から表彰状と副賞のはれるんグッズ(ぬいぐるみおよびマグカップ)が贈呈されました。

中田和輝会員(北海道大学大学院)

「フラジライス粒子追跡モデルのポリニヤモデルへの応用」

坂本理沙会員(東海大学大学院)

「物理特性を考慮した熱帯域における海洋観測ブイの最適配置に関する研究」

高木悠花会員(早稲田大学大学院)

「栄養塩環境に対する浮遊性有孔虫-藻類共生系の光合成生理応答」

### 「一時保育」

大会期間中に育児保育施設を紹介し、一時保育料等の一部を補助する制度を設けたところ、1名の会員の利用がありました。

### 「参加登録とweb受付システム」

参加登録や研究発表の申込受付などの一連の作業は、近年の大会で採用されていたWebシステム(株式会社ジェイピーコーポレーションが運営)を継続利用しました。継続利用とはいえ、細かなカスタマイズが必要になり、予算を大幅に超過してしまいました。大会参加費には要旨集1部を含んだ設定としましたが、誤って要旨集を追加購入するケースは数件にとどまり、この方式が浸透したと思われます。なお、現在のWebシステムを継続して利用するのであれば、大会毎に契約するのではなく、事務手続きや経費削減等を勘案し、学会による複数年契約についての検討をお願いしているところです。

大会参加費等の事前決済は、「銀行振込、クレジットカード決済、コンビニ決済」の3方式としました。決済方法の比率は、通常会員では、それぞれ11%、84%、5%に対し、学生会員では、それぞれ21%、62%、17%となっており、学生会員は通常会員よりもクレジットカード決済の利用率が低く、コンビニ決済や銀行振込を利用していたことがわかりました。

オンラインによるクレジットカードおよびコンビニ決済の契約・審査手続きは、前回から振込口座を変更することで継続利用することにしました。しかし、その変更にも、植松学会長名による申請が必要になるなど、手続きが煩雑であり、幹事会で手続きの簡素化について検討いただいているところです。

最後に、大会の円滑な運営にご協力いただいた大会参加者の皆様、大会賛助や広告掲載、機器展示を通じて、大会運営を支えていただいた団体の皆様、会場となりました東京海洋大学の関係者の方々に厚く御礼申し上げます。(大会実行委員会事務局長 矢野 敏彦)



## 学会記事 ③

# 日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞 受賞候補者の推薦依頼

2016年度 日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補選考委員会 委員長 古谷 研

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補選考委員会(以下賞候補選考委員会という)では、これら三賞の2016年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けております。下記参考資料をご参照の上、推薦要領に従って、これら三賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。なお、宇田賞には、研究グループとしての学術業績ばかりでなく、教育・啓発や研究支援などで海洋学の発展に貢献のあった会員を広くご推薦ください。

各賞候補者の選考にあたりましては、会員の皆様からの推薦と賞候補選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えておきます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。

### 推薦要領

以下の項目1-6について、A4版用紙1枚に記入し郵送してください。推薦用紙は日本海洋学会のホームページからもダウンロードできます。[http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos\\_awards](http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards)

#### 1. 候補者の氏名と所属機関

(岡田賞の場合は、生年月日も記入してください)

#### 2. 受賞の対象となる研究課題

(宇田賞の場合は、受賞の対象となる学術、教育、あるいは啓発

に関する業績)

#### 3. 推薦理由

#### 4. 推薦の対象となる主要論文(宇田賞の場合は省略可)

#### 5. 推薦者の氏名、印および所属機関

#### 6. 推薦日付

なお、審査の際の参考とするため、学会賞、岡田賞の受賞候補者に関しては、各候補者の略歴と業績リストを、宇田賞については推薦対象課題に関する資料もあわせてお送りくださいますようお願いいたします。

締切日：2015年9月4日(金)必着

送付先：〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9階

毎日学術フォーラム内 日本海洋学会 賞候補選考委員会

### <参考資料>

日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞細則(抄)

第1条 日本海洋学会賞(以下学会賞という)、日本海洋学会岡田賞(以下岡田賞という)および日本海洋学会宇田賞(以下宇田賞という)を本学会に設ける。学会賞は本学会員の中で海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、岡田賞は受賞の年度の初めに(4月1日現在)36歳未満の本学会員で、海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、宇田賞は顕著な学術業績を挙げた研究グループのリーダー、教育・啓蒙や研究支援において功績のあった者など、海洋学の発展に大きく貢献した本学会員の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。(以下省略)



## 学会記事 ④

# 日本海洋学会 環境科学賞 受賞候補者の推薦依頼

2016年度 日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会 委員長 野村 英明

日本海洋学会環境科学賞受賞候補者選考委員会(以下、賞候補者選考委員会という)では、環境科学賞の2016年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受けつけます。環境科学賞の制定の経緯、目的等に関しましては、学会HPに掲載の日本海洋学会環境科学賞「設立趣旨」([http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos\\_awards](http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards))または、「海の研究」第18巻第3号(2009年)、および下記の参考資料(会則)をご参照ください。

なお、受賞候補者の選考にあたりましては、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えておきます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。加えて、多数の候補者が有った場合は、若手研究者を優先いたしますが、本賞は、若手に限らず、海洋環境に関わる活動で高い評価を得ている研究者あるいは研究グループのリーダーを対象としますので、推薦要領に従って、本賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。

### 推薦要領

以下の項目1-6について記入し、下記送付先へ、郵送もしくはメールにてお送りください。

#### 1. 候補者の氏名と所属機関・身分(生年月日も記入してください)

#### 2. 受賞の対象となる研究課題

#### 3. 推薦理由

#### 4. 推薦者の氏名、所属機関、電子メールアドレス

#### 5. 推薦の対象となる主要論文(省略可)

#### 6. 推薦日付

締切日：2015年9月4日(金)必着

送付先：〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル2F

(※毎日学術フォーラム内)

日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会

メール件名を「海洋環境科学賞受賞候補者の推薦」とし、下記宛に送信。

[jos@mynavi.jp](mailto:jos@mynavi.jp)

### <参考資料>

#### 日本海洋学会 会則 第6章表彰

第37条 5. 海洋環境保全に関わる学術研究の発展、啓発および教育に大きく貢献した会員を表彰するため、日本海洋学会環境科学賞を設ける。その規定は細則で定める。

現在までの受賞者  
年度

2010 清野 聡子 / 2011 梅澤 有 / 2012 速水 祐一  
2013 栗原 晴子 / 2014 神田 穰太 / 2015 野村 英明



先回は藤井さんからクラゲの興味深いお話をして頂き、(つづき)となっておりましたが、少々手違いがありました。リレーエッセイの形式をとる本シリーズですので、岸教育問題研究会長から引き継いで2015年度から教育問題研究会長を仰せつかった轡田が再スタートをすることになりました。

教育問題研究会(前身は部会)は以前から一般(中学生)向けの様々な活動を進めており、その中で幾つかの冊子の刊行も進めてまいりました。「海はめぐる」もその一つであり、海水や物質等の循環の詳しい解説が成されています。物理的な側面でも、海流や熱・水循環に関する解説がされていますが、私たちが身近に感じるはずの海における波のことが余り触れられていないと感じる方も少なくないのではないのでしょうか。海流や水塊形成から大気との関わり合いなど、日本沿岸から太平洋・地球規模までを対象とした研究が活発になったことは、観測技術を含めた海洋学の進歩と無縁でないでしょうが、一方で数秒以下の時間スケールをもつ乱流スケールの現象の理解の重要性も近年高まったと言えます。

私が所属する大学では1年生から必修科目として実施する海洋実習中に気象観測の一環で波浪観測を実施しています。目で見て体験する実習としては格好の材料と言えますが、風浪とうねりの区別やその特性が主観に頼っていることは否めません。それでも、海上にみられる波浪の階級と風力との間の関係は大切な要素であり、以前の洋上における海上風観測資料の多くは風力に頼ってきたことは事実です。また、海上風によって生じる海面での微小な波(表面張力波)の発達過程が海上風速と密接な関係があることを基に、今や人工衛星によって洋上風速・風向を知ることが可能になりました。

ところで、海に起きる波には波長や周期でその特性が区別されることは述べましたが、かつて鏡のような海水面を目の辺りに体験しました。湖や池では同様な体験をすることが多いと思いますが、外洋の海で鏡のような水面がめったにみられないのは何故でしょうか? 海上1mの高さで0.5 m/s程度の風が吹いていれば水面に波が発生し、こうしてできた風波は山が尖っていますが、波が出来た海域を離れると間もなく山が丸みを帯びたうねりになります。海上ではこうしたうねりが立ち所に伝わって行くため、至る所で波打つこととなりますが、上述した鏡のような水面は海上で無風状態がかなり広範囲で生じることが条件となり、日本近海ではめったに体験できません。事実、私がこの鏡の海面を体験したのは、国際共同観測で赤道付近に2週間居たときのことでした。赤道無風帯と言われますが、実際に赤道付近では貿易風が間断なく吹いており、太平洋赤道域ではインドネシア付近の西部で季節風が入れ代わる5月もしくは9月にこうした気象条件に遭遇することが出来ます。

さて、海でみられる風浪(風波)やうねりを学生の海洋実習では波頭の形で行いますが、それでは測定者の主観に頼ってしまうので、厳密には周期や波長といった波の特性で区別します。実際波高計や漂流ブイなどの測器で海面の変化を非常に細かい時間間隔で測定することによって、数秒以下の周期をもつ風浪とそれ以上の周期をもつうねりの区別が可能になります。海ではこうした様々な周期(波長)をもった波がばらばらになって広い海原を伝わっていくことになり(波の分散性)、こうした波が伝わる速さ(波速)が周期にほぼ比例する特性をもつため、ゆっくり変化する波ほど遠くまで伝わってくるのが分かります。と言っても、津波のような海を浅いと思って伝わる波長の非常に長い波(浅海波)の波速は、波長や周期に関係せず、海底の深さに依存することに注意する必要があります。

こうした海の波の進む速さが周期や波長に関係するのに対して、音の波には分散性がなく、その伝わる速さは波長や周期によりません。考えてみると、もしも音波に分散性があったら、楽器などの演奏が成り立たなくなってしまいます。とは言っても、海水中を伝わる音波の速さが水温や圧力に依存して変化することは海洋学で学ぶことですね。

ところで、音波には分散性がない一方で、音源と観測者の距離が変わると音波の周期が変わる性質があります。これは両者の間の距離が変化することで音波の波長が変化することに対応するドップラー効果と言われ、緊急自動車が近づくときは実際よりも高い音を発し、遠ざかるときは低くなる経験で私たちは経験していることですが、現在主流となっている海水の流れを測定する測器としての超音波ドップラー流速計(ADCP)に利用されています。

このADCPは、船の船底や海水中に係留した音源から発した音波が海水中を浮遊する懸濁粒子などに反射して戻って来た音波の特性によって測定され、通常水平方向の流速・流向を知るために使われていますが、実は鉛直方向の海水の移動にも応用できることを示す過去の研究が幾つかあります。それらの観測結果では、朝方に下降、夕刻に上昇運動する日周変化がみられ、動物プランクトンの移動に関係付けられると考えられています。

私は、生物の生態活動に関する専門知識がないので、このあたりのごことを同じ教育問題研究会の一員である大林由美子さんに聴いてみましょう。

**K** ADCPの結果から、プランクトンの移動によると考えてもよいものでしょうか。

**O** 確かに、動物プランクトンには、夜間は表層に、昼間は深いところに、という日周鉛直移動をするものが多いことが知られていますから、それと一致していますね! ADCPは海水中に浮遊する粒子の反射波を測定しているとのことですが、どのぐらいの大きさの粒子なら観測できるのでしょうか?

**K** 限界は1mm程度だそうです。

**O** なるほど。それなら、大きさ1mm程度以上の動物プランクトンの日周鉛直移動がADCPでとらえられていると考えることができますね。カイアシ類などには1mm以上のものも結構いますもんね。

**K** ADCPの観測結果からの鉛直運動は、春と秋に極大となる季節変化が顕著であるという報告もあるそうですが、これは如何でしょうか。

**O** それはまさに生物量の季節変化を反映しているそうですね。春と秋には、条件が整えば植物プランクトンのブルームが起こることが知られていますが、それに伴い、ADCPでとらえられる動物プランクトンも増加するでしょうから。

**K** ADCPが生物活動の推移を知る手段にも使えると言うことは大変興味深いですね。

今回は、生物活動やそれによる物質の循環にまつわるお話について、大林さんから聴けることを期待しています。

# アカデミア メランコリア(第8回)(若手のコラム)

東海大学大学院海洋学研究科海洋科学専攻 修士2年 加藤 彩愛

はじめまして。東海大学大学院海洋学研究科修士2年の加藤彩愛です。前回のコラムを担当された東大の林さんよりご指名いただき、今回のコラムを担当させて頂きました。

「アカデミア メランコリア」、憂鬱なる学問。現在の日本の学問の場としての大学への進学率は50%ほどであり、東京などの大都市に限定すると60%を超えることもあると聞く。一方で、都市部でない地域では40%を下回ることもあるという。この、都市部と、それ以外の地域間における格差の背景には、主に金銭的要因があるといわれている。しかし、たとえ進学率の高い都市部に暮らしていたとしても、家庭環境などによっては大学進学に伴う金銭的な問題が大きな壁となって立ちはだかることもある。

大学進学に胸を高鳴らせる若者に、入学金や学費の支払い、一人暮らしのための生活費の工面、といった金銭的な問題が色濃く影を落とすとき、「学びたいのに学べない、行きたいのに行けない。お金がないから。」という現実に泣く泣く進学を諦める人が生まれる。

…かくいう私も家庭環境が複雑で、大学進学費や修学費の工面には大変苦労した。幸いなことに、生まれ育った東京には、高校生でも高い時給で雇ってくれるアルバイト先がたくさんあり、ある程度のお金は自分で用意することが可能だった。また、「教育こそが最も価値あることだ」といって、わたしを大学へやろうと、細かくて難儀な種々の給付金や奨学金の申請に母が奔走してくれた事は、何よりも大きなことだったといえる。当時の私にとって、お金があるかないか、とは、飯を食えるか食えないかと同等であり、そのお金を学費へ充てるのだから、学ぶことは命がけのことなんだと、それでもお前は学ぶのかと、自分に問うた時期もあった。現在は、乗船アルバイトを紹介して頂いたり、奨学金をもらったりしながら、普通に学生生活を送ることが出来ている。私は周囲の人々の助けを借りて、今ここにこうして学んでいられることに、感謝すると共に、幸運だったと思わずにはられない。

とにもかくにも、修学費は高い。そのため「大学へ行って学びたいのに学べない」若者が増える。しかしこういう人がいるという事は、ニュース、特集番組、新聞などでたまに目にするだけで、案外大して、大きな問題として認識されていないように感じる。なぜなら、こういう問題を扱っている人たちが、「大学へ行って学べた人たち」だからなのではないか。わたしも当時の思いを忘れそうになる。もちろん、そうでない人もいるということは承知しているけれど、「大学へ行って学びたいのに学べない」若者を放っておいたら、この先日本は、やせ細っていくばかりになってしまうんじゃないかと度々思う。学びたいという意欲こそが、世の中を動かす原動力になると思うから。

以上のような現実がある中で、若手の育成を掲げている海洋学会が、こうして、若手の声が多くの人目に触れる場を設けているという事は、とても重要なことだと考える。責任は夢から始まるという言葉があるように、困難な状況に気付き、目を向け、変えてゆこうと思うためには、豊かな想像力が不可欠だが、自分が体験したこともない状況を想像するのはなかなか難しい。しかし、想像できないのならば、こういう場で見て、聴いて、感じればよい。育成の対象とされている若手も、こういう場に会って、当事者としての意識が更に強くなることが期待できる。このような発言の場が、今後たくさん生まれ(必要なら自分で立ち上げて)、若手の意見が多くの人目に触れ続けることが出来るよう、強く願う。



JOS News Letter

JOSニュースレター  
第5巻 第1号 2015年6月1日発行

編集 JOSNL編集委員会

委員長：津田敦 委員：小守信正、根田昌典、田中祐志

〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5

東京大学大気海洋研究所

電話/FAX 04-7136-6172

メール tsuda@aori.u-tokyo.ac.jp

デザイン・印制 株式会社スマッシュ

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町68

西川徹ビル1F

http://www.smash-web.jp

発行  日本海洋学会  
The Oceanographic Society of Japan

日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9F

(株)毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mynavi.jp

※今号の表紙および記事には関係のない写真は、東京大学大気海洋研究所佐野雅美会員から提供いただきました。